

第8回原野谷学園新たな学園づくり地域検討委員会 概要

日 時	平成30年11月28日（水） 19:00 ～ 20:35
場 所	原野谷中学校図書室
出 席	委 員 17人（欠席5人） 事務局 教育長、教育部長、学校教育課指導主事、教育政策室係長 教育政策室指導主事、教育政策室主任
内 容	
<p>1 開 会</p> <p>2 教育長あいさつ</p> <p>3 委員長あいさつ</p> <p>4 報告事項</p> <p> (1) 第7回地域検討委員会について</p> <p> ※事務局より説明</p> <p>5 協議事項</p> <p> (1) 検討委員会報告書（案）について</p> <p>【委員長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の検討委員会で報告書の案を出し、それについて様々な御意見をいただいた。今日、お配りした報告書案は前回の委員会での御意見を反映して修正を行っている。再度皆さんの御意見をいただきたい。 <p>【委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 ページの2行目、「南部は近郊市街地の一部が形成される一方、北部は南アルプスの八高山から続く山間地が広がっています。」の文章の意味は分かるが、表現としては「南部は近郊市街地の一部を形成し、北部には南アルプス～」とした方がよいのではないか。 <p>【事務局】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現については再検討させていただく。 <p>【委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 ページ4行目「水田や茶園風景と落ち着いたある里山風景」の部分は風景が重複しているため、はじめの風景を削除してもよいのではないか。 <p>【委員長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10ページの第4回の検討内容でメリットとデメリットについて協議しているが、報告書の記載にあたってデメリットと表記することは、マイナス点のような印象を与えてしまうため、「デメリット（課題）」とするのが我々の検討内容としてはふさわしいのではないか。 ・ デメリットの2番目に「上級生の態度が下級生に悪影響を与える。」とあるが、視察した中部学園などの現状では、下級生が上級生に憧れたり、上級生が下級生に優しく接したりしている。また、中学3年生と小学1年生の交流がすごく進み、お互いに良い影響がある。あまり悪影響はない。ここは、「上級生の下級生への接し方に関する指導が重要になる。」というような表現はどうか。 <p>【委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上級生に好ましくない態度があった場合に、下級生に対して悪い影響を与えることがある、という理解をしている。 	

【委員長】

- ・小中一貫教育にすると現実にはむしろ低減する傾向にある。

【委員】

- ・デメリットがないならばカットすればよいのではないか。

【委員長】

- ・この部分はカットするというところでよろしいか。
(委員：異議なし)

【委員】

- ・課題と成果の部分を白丸と黒丸で色分けしているが、これは必要か。

【委員長】

- ・分かりやすいので、このままとしたい。

【委員】

- ・提言の中で、義務教育学校について、現段階では掛川市においては検討しないということだが、将来的には義務教育学校の方が効率的だと私は思う。義務教育学校を目指す、ということを入れてもよいのではないか。

【事務局】

- ・今のところは、義務教育学校については考えていない。市全体の学校再編に取り組んでいく中で考えていかななくてはいけないとは思っている。その前に小中一貫教育ができないと、義務教育学校はできない。まずはそこまでということで、義務教育学校まで踏み込んで考えてはいない。

【委員長】

- ・市の方向性は今の説明のとおりである。こういった委員会の特性として、市の方針を踏まえながらも委員会としてはぜひ義務教育学校も視野に入れて、というような表現になるのかと思う。今後、検討したい、要望したいということを報告書に入れることは可能だと思われる。

【委員】

- ・一体校を目指すのであれば、将来的な姿が義務教育学校にあると思う。検討しないということではないと考えるが。

【事務局】

- ・教育委員会としては、まだ義務教育学校までの検討は行っていない。
- ・教員の人事の問題もある。例えば義務教育学校になると管理職、校長は一人になり、本当にやっていけるのかという不安もある。
- ・学校運営上、教員が不足する時代に入ってきている。市内には小さな学校がたくさんあり、教員の数も必要になる中で、義務教育学校における教職員の免許及び教員配置の問題も当然出てくるのではないかと思う。

【委員長】

- ・いずれ義務教育学校を検討する時期が来るのではないかと思う。そこに掛川市が乗り出すかどうかを考えなくてはいけない。乗り出す場合には、この報告書が根拠になると思われる。将来の行政関係の方の考えにも左右されると思うが、将来的には検討も視野に入れるというような、婉曲的な表現にして、当座は小中一貫教育を目指すということにしたらどうか。

【事務局】

- ・委員会の皆さんの方でそういう要請があるということであれば考えていきたい。

【委員長】

- ・この報告書の内容が市の方針によって実現しなくてもかまわないというような範囲での表現をしておいた方が、逆に掛川市が義務教育学校に乗り出す時にこの報告書が根拠になる。あまり強く言い過ぎず、2重3重の婉曲をかけておけばよいのではないか。施設隣接型等で校長が二人になると、この地域の一体校では1学年に何学級もあるような規模にはならないので、校長が2人いると調整をしないといけない。職員会議は小学校と中学校の2回開かないといけない。2つの会議を開いた後に、連携をどうするのかということを検討していくため手間取る。校長が複数いることのデメリットが付随してくる。一方で、1人の場合は校長に負担が集中する。自分の裁量で学校運営のかなりの部分を決定できるが、その分負担も大きい。掛川市全体の校長の人数を確保しなくてはならない部分もある。将来的には検討する可能性を視野に入れるなどの婉曲を持たせて盛り込めば、もし将来義務教育学校に乗り出すというときにはよいか。磐田、袋井、島田などで近隣が始めて、掛川市としてもやる方向が出てきた場合に、この部分が根拠になる。

【委員】

- ・今の状況では考えにくいのかもかもしれないが、一体型にした時の目指す姿として4-3-2などの区切りは義務教育学校では自由にできるけれども、2つの学校になるとどうか、やっぱり6-3で、ということになることも考えられるのではないか。目指す姿としてあるのならば、検討会として検討しなかったというのは寂しいのではないか。

【委員長】

- ・あえてそこにあまり深く踏み込まなかった、というのが私の司会運営でもあった。

【委員】

- ・考え方としてあるのかもかもしれないが、一体型か分離型にするかという方向性で来ているのだから、まず一体校を目指すということ came。これは十分難しい問題であるので、それだけでよいのではないかと思う。今後、義務教育学校という問題が出てきた時に検討すればよいのではないか。ここに謳ってあるからということではなく、課題は時代時代で出てくると思うので、その時に検討すればよいと思う。特に今まで何も検討がないのに、義務教育学校に触れるのもどうかと思う。急に出てきて、本当にこれを目指すのかと言われたときに、確かにそうだという方向性でこの会で行くのならばよいが、検討不足の点を載せていくことにはどうかと思う。

【委員】

- ・県立の中学校と高校が一緒になっているところがあるが、中等教育学校というところまでは、なかなか踏み出せない。中等部と高等部に別れていて、施設一体型で一緒に6年間行っているが、校舎が別れていたり、階が違っていたりしている。沼津市立の場合には、中等部、高等部にそれぞれ校長がいる。義務教育学校は段階が1つ進んでいるというイメージがある。一気にそこまで行くことは難しいと思う。

【委員】

- ・一案として、義務教育学校は今回の検討では検討できなかった部分であるが、一体校が出来たら、将来的には義務教育学校について検討していくことという提言を載せることはどうか。そういうことも視野に入れて将来的には検討していく必要がある、というような文言であれば入れられないこともないのではないか。

【委員長】

- ・入れるのであれば今後の検討もあり得るぐらいの一言でよいと思う。今、意見が分かれている感じだがいかがか。
- ・一体型で義務教育学校でない場合、校長が複数いる場合、例えば4-3-2という学年の区切りは可能なのか。

【事務局】

- ・可能である。
- ・1番の問題は教員がいないこと。義務教育学校は小中の両方の免許を持っていないとだめなので、その教員をどう確保するかということ。
- ・管理職にもそれなりの指導力が求められる。国もそこを大きく言えていない。国も教員不足をようやく認識してきた段階である。義務教育学校が進められるのかどうか疑問に思っている。掛川市としては小中一貫からいきなり義務教育学校にということはない。
- ・教員の確保ができない。現にすでに苦慮している。免許の問題がクリアできなければ、今の状況では苦しいと思っている。
- ・今日の研究授業を行った原野谷中の英語教員は小学校の免許を持っている。彼は、小中の免許を持っているから義務教育学校にいられるが、例えば中学校の英語教員で小学校の免許を持っている教員はほとんどいない。中学校と高校の免許であることが多い。小学校の免許をとるような制度を国が作っていくのではないと思うが、まだ時間を要すると思う。

【委員長】

- ・諸条件を検討するというようなことも入れない方がよいか。

【事務局】

- ・義務教育学校をまったく作らないということも考えてはいない。小中一貫教育という9ヵ年を見据えた教育を行うことは大事なので、多少は施設分離型であったとしても、カリキュラムは取り入れていきたいと考えている。

【委員長】

- ・課題は小中学校両方の免許を持っている教員の絶対数が不足していること。両方の免許を有する教員が義務教育学校に集まると、他の学校が手薄になるという懸念がある。アンバランスな状態自体を長期的に解消していくということも盛り込めないか。

【事務局】

- ・提言であるので、皆さんが義務教育学校をどういうものか御理解いただいた上で協議していただければよい。

【委員】

- ・今日の公開授業を拝見し、中学校の英語授業と変わらない早さで、子どもの反応もとてもよかった。子どもの柔軟性、対応能力は大人の何十倍もあると言われている。子どもは変化に順応していくので、先生方にはチャレンジをして、失敗を恐れずにやっていただきたい。最後は学校の取組がすごいという形になっていかないといけないので、思いっきり力を発揮していただきたい。
- ・今、小中一体校を考えていく上で、原野谷学園の現状と今後のデータも見ている中で、児童生徒数の面で適正規模の条件に引っかかる部分もあるのではないと思う。今後はさらに心配になってくる。教育委員会で今後検討していく学校の再編についてお話できることがあればお話いただきたい。このことについてこの検討委員会の中で出していくことが可能か伺いたい。

【事務局】

- ・学校再編については、委員会内で作業を進めている。公表できる時は、正式に検討委員会をスタートさせて、市内の小中学校のすべての学校について検討が始まる時である。その中で、委員が心配された原野谷学園がどうなるのかということだが、人数がどう変わっていくのかを先まで見ながら検討していくことになる。原野谷学園に限らず、掛西学園や掛東学園にしても大きく変わってくる可能性がある。中心部から周辺部へ子どもが流れていくようになれば、増えることもあるだろうし、その区切りがどこになるのかを検討している中で表には出せない部分である。今の原野谷学園がそのままの形で残るのかは、正直申し上げられない状況である。

【委員】

- ・来年から学校再編の検討を始めるのであれば、原野谷学園の検討委員会がこの1年間何のためにやってきたのか。原田地区からこの委員会に出ているが、このままいけば原田地区は過疎になる。原野谷中学校の場所に新しい学校が出来るということで、地域でも話を進めてきた。

【事務局】

- ・原野谷学園が大きくなるような再編ができればよいということではないか。

【委員】

- ・場所が原野谷中学校でなくなるのが問題だ。意味が全然違ってくる。
- ・再編を行ってからこの話を進めればよかったのではないか。

【委員】

- ・子どもたちにとって魅力ある学校になることが一番大切である。それには市教委も支援をしないといけないし、コーディネーターをはじめとした学園の関係者も現に努力していただいているが、今後もしていただかないといけない。校長、教員も必死になってやることによって、原野谷の一貫校が原野谷にとって、掛川市全体にとって魅力あるものにしていく義務があると思う。地域もこのことについて努力をして、みんなで一体校に向けて頑張っていこうという姿を見せることがまず大事だと思う。魅力があれば人口増につながってくると思う。子どもの姿を目指すべき姿にしていくために、みんなが一つになろうとすることが一番の目的であると思う。
- ・提言に義務教育学校が入るとずれてしまう部分も出てくるので、しっかりと検討していかないと入れるのは無理ではないかと思う。一体校の中味についてたくさん提言していくような方向にしたらどうか。

【委員長】

- ・学区に関する課題については、24ページの一番下にある、「近隣地域との調整を行うこと」の部分に婉曲的ではあるが入っている。
- ・義務教育学校については、可能性も含めてというような形で一言入れておいた方がよいのではないかと、一委員として思う。
- ・実態としては、委員の皆さんの理解の問題や、免許のような要件の問題もあって、あまり検討はしてこなかった。しかし、調べてみると私の中で義務教育学校の方がやりやすいという理解に至ったこと、さきほど別の委員から義務教育学校について提案があった。他の委員からはそこまで踏み込むのはふさわしくないという意見も出ている。

【事務局】

- ・義務教育学校を謳うのはよいが、ある意味、原野谷学園を大きくしないといけない、先ほども言ったように教員を確保しないといけない。原野谷学園だけの一体校だけではすまないという考えになってくる。もっと広げていくような形にならないと義務教育学校はできないと思う。
もっと言えば、現在の原野谷中学校の場所に一体校を作るというのは厳しくなると思う。そういう問題が出てくるのではないかと心配している。

【委員】

- ・話のポイントがずれてしまうのではないかと心配しているが、他の方がこの資料を読んだり、話を聞いた時にどこまでが一体校で、どこからが義務教育学校なのかという深い理解がされるのか。いままで説明会で集まってこられた方については、原野谷中と原田小、原谷小が1つの学校になるというくらいの理解で、一体型や分離型をどれだけ地域の方が理解されているのか。そこに義務教育学校という名前がまた出てきて、義務教育学校と一体型がどう違うのか、そこの詳しい説明がどれだけの方に周知徹底できるのかと思う。どれも同じだと考えている皆さんが多いのではないか。
- ・掛川市が全国で最初に幼保園を立ち上げた。幼稚園があって、保育園があったところを再編をして、こども広場あんりが幼保園として立ち上がった。幼稚園部と保育園部

があり、それぞれに園長がいた。同じ施設の中に園長が2人いるというのは、幼稚園と保育園で機能が違っていても、不具合がたくさんあった。認定こども園という新しい形ができて、認定こども園では園長が1人になった。あんりも認定こども園になって3年目になるが、幼保園の基礎があるので、認定こども園への移行に際しても何の問題もなくできている。幼保園を立ち上げたことはまったく無駄ではなかった。認定こども園になってとてもやりやすい。園長が1人、副園長が元保育園部の園長で、一緒にやっているの、幼稚園のニーズも保育園のニーズも一緒に生かしてやることのできる。資格については、保育士しか持っていない、幼稚園の免許しか持っていない職員がいる。5年の間に両方の資格をとるというシステムができていたので、副園長は保育士の資格しか持っていなかったが、昨年猛勉強をして、幼稚園の免許をとった。国もとりのしやすいシステムを作ってくれている。学校もこれから小学校、中学校の免許がとりやすくなるのではないかと思う。

- ・まずはじめに一体校として整備して、義務教育学校の方向に進んでいく可能性があるのではないかと思っている。

【事務局】

- ・おっしゃるとおりである。先まで見て作るのであれば、範囲を広げて考えないといけない。たくさん学校を作るわけにはいかないの、広範囲になるということである。

【委員長】

- ・免許資格の点については、一定のシステムを活用することによって、小中両方の免許をとるということはおそらく可能になると思われる。
- ・義務教育学校の可能性を検討するのならば、義務教育学校の場合には学校がかなり広がるおそれがある。

【事務局】

- ・義務教育学校を書くことに問題はないが、小中一体校ができたとして、そこから義務教育学校に移行することは可能であり、ワンステップ置くことが必要である。一度に義務教育学校となるとかなり議論をしながら進めていかないといけない。学校再編の検討もそのことを頭の中に入れて検討していかないといけない。
- ・将来的に義務教育学校を入れることは可能であるが、学区が広がるということを知った上で判断していただきたい。

【委員】

- ・義務教育学校を遠い将来志向してもしなくても、学区が広域になるのは、これからの子どもの数や、地域の動静を考えれば自ずとそこに行かなくてはいけなくなるのではないか。
- ・今、全国で義務教育学校が少しずつ増えている。8回も検討委員会を行った中で一言も表現がないというのはいかかなものかと思う。実現するとしても遠い将来、10年先になるか20年先になるか分からないが、学校マネジメントの観点からいけば、当然出てくることだと思う。幼保園で10何年苦しんできてやっと国が動いたというくらいだから。

【事務局】

- ・そちらへ踏み切るためには人がいてこそ話であり、人がいないという現実があり、現に学校の校長がとても苦労している。人がいない、教員がいないという現実がある。義務教育学校が現行制度のままならば、地元出身の教員が半数を切っている状況の中でどれだけ教員を集められるのかという大きな問題がある。
- ・教育委員会が「義務教育学校に取り組みます。」と言った場合、学校職員からの反発も予想され、その危険を感じている。免許状のことが改正になり、小中学校どちらでもいけるようになったとしてもそこは変わらない。そのような実態を地域の皆さんに御理解いただく必要もある。来年度から、もっとそのような話をしていかななくてはならないと考えている。将来的に義務教育学校のことを示すことは良いが、どれだけ皆

さんが理解してくださっているか。この提言にはそれだけの重みがあると思っている。

【委員長】

- ・いろいろな形でこの提言が使われ、根拠になり得るので、書いたならば書いたなりのリスクがある。書かない場合にはそれなりの問題が出てくるかもしれない。
- ・1つの案を出し、よければ載せるし、よくないということであれば載せないようにする。「長期的には市の実態と方針を踏まえたうえで義務教育学校への移行も検討し得る。」という1文を挿入するのはいかがか。

【委員】

- ・義務教育学校という制度そのものを説明する責任が生じるのではないか。義務教育学校というのはどちらかと言うと行政の視点から見なくてはいけない。検討委員会としてそれを出すのであれば、我々検討委員が小中一貫教育の中で義務教育学校がどのようなものか理解したうえで出すのであればよいが、私たちがそれを説明するのはなかなか難しいのではないかと思う。

【委員長】

- ・検討の実態と表現が乖離しているという御指摘だと思う。

【委員】

- ・義務教育学校という言葉が出てきた時点で、地域の皆さんは「これは何だ。」となると思う。検討してこなかったのだから、あえて出す必要があるのかと思う。

【委員長】

- ・2人の委員からあまり必要ではないのではという意見をいただいた。案を推す御意見がなければ、案を取り下げる。

【委員】

- ・研究者としての立場から言えば、将来の日本は、子どもが減って、働き手も減ることが予測されており、働き手が減るということは教員も減るといふことになり、なるべく義務教育学校のような形にして経費節減していくことが必要だと考えていると思う。今後、学校の数もかなり減ると思う。100年後には掛川市内でも中学校が3つくらいになるかもしれない。そのくらい減ってしまうかもしれない。そうなった時には、こういう検討委員会で考えることになると思う。今の理論で行けば、恐らくそうなるだろうと思うが、この検討委員会では、小中一貫教育にふさわしい学校形態としては小中一体型の学校ということにとどめてるのはどうか。義務教育学校については、後年、別に検討するようにし、小中一体型の学校を設置し教育を進め、さらに小中一貫教育を効果的に推進するために義務教育学校の設置を提言するようにすればよいのではないか。50年後の委員にそれを委ねたらどうか。

【委員長】

- ・特に強い賛成がなければ、見送ることにしたい。ここではそこまで踏み込まないということにしたい。

【委員】

- ・22ページの施設一体型のよさの上から5行目、ゴールの姿を小学校1年生が感じるというふうに読める。「小学校1年次から」とか「小学校1年生の時から」というような表現がよいのではないか。
- ・同じページの下線が引いてある最後の1文が「リーダー性」の「向上」を「発揮」させるとなっている。「リーダー性の向上を図る」というような表現がよいのではないか。

【委員】

- ・18ページの④の下から4行目に「縦の連携に意識した取組」とあるが、現在の取組は小中学校同士を融合させるのか、という点に重点をおいている。防災学習や英語授業においても原谷小と原田小が中学で一緒になるということ意識した授業を行っている。「縦の連携」は確かに意識しているが、それだけではなく、この間の学校体

験の時にも原田小と原谷小の子どもが一緒になって活動を行うようなことも行っている。取組の視点の中に「横の連携」も意識していることを加えて欲しい。原野谷学園の場合には、あんりで一緒だった子どもが小学校で別れて、それが中学校でまた一緒になるという環境も背景にはある。

【事務局】

- ・横の連携の上に縦が乗ってくると思うので、土台をしっかりとした上での縦の意識をしていると変更する。

【委員】

- ・学園で行っているのは縦だけではなくて、2つの違う小学校が中学に上がると1つになる、ということ意識していることが記載されているとよいと思う。

【委員長】

- ・ここでの時間は限られているので、この後報告書を読んでおかしいと思う点があれば、事務局へ御連絡いただきたい。その締切について、事務局からお知らせいただきたい。

【事務局】

- ・12月3日までに御連絡いただきたい。

以上で協議を終了した。

6 連絡事項について

(1) 今後の予定について

- ・地域説明会 平成31年1月26日（土）13:30～ 原野谷中学校
- ・第9回地域検討委員会 平成31年2月25日（月）19:00～ 原野谷中学校

7 閉 会